

李賀詩における年齢表現について

——屈折と疎外の自己表象——

小田 健太

はじめに

年齢は、個人を規定する客観的な指標の一つである。年齢を基準とする人生の過程に言及した記事として、『論語』為政篇の一節は広く知られている。

子曰、吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而从心所欲、不踰矩。
(子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて、矩を踰えず)。

その時々の年齢に対応した儒者としての孔子の生き方が記されている。ここに端を発する古典的年齢観とも呼ぶべき枠組みが、古典中国における知識人たちの認識を強固に形成していたであろうことは想像にかたくない。

ここで注目したいのは、二十代についての記述がない点である。おそらく、二十代は十五歳で学問を開始してより三十歳で自立するまでの過渡期、すなわち人生の修行期間と捉えられていたのである。その二十代の自分を多く詩に詠じたのが、中唐の李賀(七九〇〜八一六)である。

李賀の「贈陳商」(吳企明『李長吉歌詩編年箋注』中華書局、二〇一六、一三三二頁、全三四句。以下『箋注』)は、詩題にあるとおり、韓愈の門人でもあった陳商(？く八五五？、字は述聖)に向けて詠じられたものである。例えば第九句以降の四句に、「淒淒陳述聖、披褐俎俎豆。学為堯舜文、時人責衰偶(淒淒たり陳述聖、褐を披て俎豆に俎す。堯舜の文を為るを学び、時人に衰偶を責む)」と見えているように、時流を形成している他者への迎合を排して、真摯に古典(「堯舜文」と向き合う陳商の姿が表現されている。それより以前の冒頭の八句において、李賀は自身の現況について次のように詠じている。

長安有男児 長安に男児有り

二十心已朽 二十にして心已に朽ちたり

楞伽堆案前 楞伽 案前に堆く

楚辭繫肘後 楚辭 肘後に繫く

人生有窮拙 人生 窮拙有り

日暮聊飲酒 日暮 聊か酒を飲む

祇今道已塞 祇今 道已に塞がる

何必須白首 何ぞ必ずしも白首を須たん

思うようにならない「人生」に不満を抱きつつ酒をあおる長安の男児(「李賀」)の、いささかデカダンスな気分が滲み出ている。とりわけ「二十にして心已に朽ちたり」という第二句は有名である。この句が人口に膾炙するようになった要因は、「心已に朽ちたり」という精神的な枯渇の直接的な吐露が、修辭的技巧に傾かない素朴な表現であるだけに、真に迫って読み手に強い印象を与えるのに加え、しかも「二十」の若さでそのような状態に至った

という悲劇性が、李賀の多難な生涯をこれ以上ないほど端的に象徴しているからであろう。後述するように、「朽」字は老境とこそ齟齬なく密接に結びつくものであるため、「二十」との取り合わせはいかにも不釣り合いであり、それだけに人目を引かずにはおかない危うさを含んだ句になりえていると考えられる。

自力ではどうにもしようのない社会的不遇や、それによって湧き起る否定的感情が、文学作品創作のための主たるエネルギー源の一端を担う限り、精神的な枯渇をかえって情熱的に詠じることは、時代を問わず普遍的に認められよう。しかもその情熱は、理知に乏しい若者の未熟さを油として、しばしば一層激しく燃え上がる。してみると、「贈陳商」の第二句が個性的表現となりえている理由は、一見さりげないようにも感じられる「二十」の語に求められるわけである。李賀は「贈陳商」以外の作品にも「二十」の語や、それに準ずる年齢表現を詠じている。しかし彼の年齢表現を網羅的に取り上げて考察の対象とした専論は見当たらないようである。李賀の年齢表現にはどのような含意が認められるのか、また、唐代の類例と比較した場合に彼の独自性はいかなる点に看取されるのであろうか。本論は、それらの諸点について考察を試みるものである。

一 唐詩における「二十」の肖像

李賀の詩について考察を加える前提として、まずは他の唐詩における年齢表現としての「二十」がどのように詠じられているかをまとめておきたい。

唐詩において「二十」という場合、盧綸「従軍行」(劉初棠『盧綸詩集校注』上海古籍出版社、一九八九、二六四頁)の冒頭に、「二十在辺城、軍中得勇名(二十にして辺城に在り、軍中 勇名を得)」とあるように、勇名をは

せた兵士の年齢を表す用例が認められる。この兵士は若くして活躍の場を獲得したのであるが、続く第三・四句に、「巻旗収敗馬、占磧擁残兵（旗を巻いて敗馬を収め、磧を占めて残兵を擁す）」と見えているように、厳しい戦いを強いられてもいる。ぎりぎりの死闘を前線で展開する存在として、二十歳の兵士が描写されているのである。

盧綸描くところの二十歳の兵士が、政治的中枢からは隔たった異域で活躍していたのに対し、韋応物（七三七～七九〇）の「相逢行」（孫望『韋応物詩集繫年校箋』中華書局、二〇〇二、二三二頁）に、

二十登漢朝 二十にして漢朝に登り

英声邁今古 英声 今古に邁まく

適從東方来 適あてて東方たより来たり

又欲謁明主 又明主に謁せんと欲す

……

……

邂逅兩相逢 邂逅ふたりながら相い逢い

別來問寒暑 別來 寒暑を問う

と詠じられているのは、「明主」に謁見するために「東方」から中央へと馳せ参じた「二十」の英才である。引用に続く二句に、「寧知白日晩、暫向花間語（寧ぞ白日の晩るるを知らん、暫く花間に向いて語る）」と見えているように、時の経つのも忘れて語る若者は、花の似合うすがすがしい印象を与えるようである。

学問や詩文創作といった文化的営為において、二十歳にして高度な境地に到達したと詠じる例もある。一例として、孟雲卿の「傷懷贈故人」（『全唐詩』卷一五七）には、

人生早罹苦 人生早く苦に罹らば

壽命恐不長 壽命恐らくは長からず

二十学已成 二十にして学已に成るも

三十名不彰 三十にして名彰らかならず

と詠じられている。人生の早い段階で苦勞していることによって、命が長くは続かないのではないかと恐れ、二十歳で学問が上達したものの、三十歳になっても名は知られていないというように、現状への不満を述べる文脈の中に「二十」の語が用いられている。ただし「二十学已成」という句を単独で取り出ししてみるならば、それ自体の中に愁うべき否定的な要素は認められない。むしろ、若くして学問的な達成を獲得することが普通ではなかなかありえないだけに、三十歳に至るまでの間に活躍する場がえられなかったという事態に対する落胆が浮き彫りになるのである。つまり孟雲卿の「二十」は、肯定的に回想すべき人生の一時点として詠じられていると考えられる。

文化的當為を表現対象とする例として、次に杜甫（七一―七七〇）の「醉歌行」（『杜詩詳註』卷三）を見てきたい。これは原注に、「別從姪勤落第歸（從姪勤の落第して歸るに別る）」とあるように、いとこの子である勤に送った作品となっている。落第した勤を慰撫するように、彼の類い稀なる才能を讃えて次のようにいう。

01 陸機二十作文賦 陸機は二十にして文の賦を作り

02 汝更少年能綴文 汝は更に少年にして能く文を綴る

……

07 詞源倒流三峽水 詞源 さかして 倒に流す三峽の水

08 筆陣獨掃千人軍 筆陣 獨り掃う千人の軍

09 只今年纔十六七 只今 年纔かに十六七

10 射策君門期第一 射策 君門に第一を期す

二十歳にして「文賦」を作った陸機を引き合いに出しながら、それよりも若い「十六七」であるにも関わらず、試験で一定の成績を収めた勤の文才を賛美している。このように、若年者の文学的才覚に価値を認めている一方、「戲為六絶句」(其一)、『杜詩詳註』卷二一の「庾信文章老更成(庾信の文章老いて更に成る)」という句が最も端的に示唆しているように、杜甫は、年齢の積み重ねによって文学作品の完成度はより高次に至る、という考え方を持っていた。「醉歌行」において、二十歳で「文賦」を生み出した陸機をあげて取り上げているのは、一篇の主意が年若い勤を慰めようとする点に置かれているからであると判断できる。

ここまで、李賀を除く唐詩における、年齢表現としての「二十」の用例を概観してきた。盧綸と韋応物とともに固有名詞を持たない仮構の人物として二十歳の若者を作品中に登場させていた。一方は前線で困難な戦闘に立ち向かう才気に満ちた兵士として、一方は天子に謁見するために東方から馳せつけた英才として描出されている。孟雲卿や杜甫は、学問や詩文創作の方面で成果を収めた年齢として「二十」を用いていた。そして本節で取り上げたいずれの例にも共通しているのは、作品中の二十歳の人物が、みなそれぞれの持ち前を發揮しており、少なくとも二十歳という限定的な一時点においては、それが肯定的な評価の対象になっているということである。

二 李賀詩における「二十」の諸相

(一) 実際生活上の貧賤

李賀の詩における「二十」の諸相について考察を加えるに際して、まずはじめに確認しておきたいのは、李賀自

身の年齢を暗示する「二十」は、ほぼ例外なく否定的な価値と密接に結びついているという点である。その一つが貧賤であり、以下に取り上げていく「勉愛行二首、送小季之廬山」(其二)と「南園十三首」(其四)の二首がそれに該当する。順に確認していききたい。

「勉愛行二首、送小季之廬山」(其二)、『箋注』五四一頁、全一六句)は、困窮によつて養いきれなくなったために、末弟を廬山に送り出したときの作である。第八句に、「下国饑兒夢中見(下国の饑兒 夢中に見る)」と詠じられているように、「饑兒」の語によつて弟を表現しなければならないような状況を打開するための、それは苦肉の策であった。第九句以降、本来であれば自力で家族を養うべき兄としての自分に言及して、李賀は次のように述べている。

09 維爾之昆二十餘 維レ爾の昆 二十餘

10 年来持鏡頗有鬚 年来 鏡を持するに頗る鬚有り

11 辞家三載今如此 家を辞して三載 今此くの如し

12 索米王門一事無 米を王門に索トむるも一事無し

ここで汲み取っておくべきは、第九句に見えているように、弟にわざわざ自分の年齢を告げていることの意味である。そこで考えてみたいのは、第十句との関連性である。「頗有鬚」、つまりほおひげが生えてきたと詠じているのは、王暁強編著『李賀詩解謎』(山東友誼出版社、一九九八)に、「『頗有鬚』、生了頗多的胡須、婉言自己老了(『頗る鬚有り』とは、多くのひげが生えたということであり、婉曲に自分の老いを述べている)(二九九頁)とあるように、老いの表象として理解されている。この句が老いの直接的な吐露としては括り切れない要素を含んでいる点に留意したい。それに関連して一步踏み込んだ指摘をしているのは、彭国忠氏である。『新訳李賀詩集』(三

民書局、二〇〇八）に、「詩歌九至十二句叙写自己年来無所成就の内心傷痛、写法也比較独特、如以照鏡見鬚説自己年齢漸大、這与一般詩人常用的鬢白髮稀之類頗為不同（第九句から第十二句までは、大成できない自己の心の傷みを写し取っている。その描写の方法は独特で、鏡に映ったひげを見て自分が年を取ったことを述べている。こうした場合、一般的には白髪や頭髪の薄くなったことを詠じるものだが、ここではそれとは異なっている）」（一八〇頁）と記されているのがそうである。氏の指摘のとおり、鏡に映った自分の老いた姿を詠じる場合には、直覚的に老いを連想しやすい白髪のような身体語を選択するのが一般的である。

それでは「頗有鬚」という表現には、いかなる含意が込められているのであろうか。実のところ「頗有鬚」は、李賀と近い時代の例でいえば、岑参（七一五？～七七〇？）の作である「玉門関蓋將軍歌」（劉開揚『岑参詩集編年箋註』巴蜀書社、一九九五、三七五頁）の冒頭に、「蓋將軍、真丈夫。行年三十、執金吾、身長七尺、頗有鬚（蓋將軍は、真の丈夫。行年三十にして執金吾、身長七尺にして頗る鬚有り）」と詠じられている。「行年三十」とある点に着目したい。李賀が「二十餘」と詠じているのと近似した年齢に言及しているからである。岑参詩を踏まえた上で李賀詩を眺めてみるならば、第十句は老いの表象ではなく、本来であれば社会的な活躍が可能であるような、あるいはそれが周囲から期待されるような肉体的な成熟、合わせて精神的なそれをも同時に示していると考えられる。ほおひげが生えるという肉体的成熟は、岑参が描く「蓋將軍」のような社会的有用性を暗示する。ひいては、末弟を他所へやらずに一族を自力で養えるだけの能力が自分には備わっているのだという李賀の自負が垣間見える。にも関わらず、そうした自負に見合うだけの社会的身分や、あるいはそれに伴う俸禄が獲得できないのだと述べるをえないところに、岑参詩とは異なる李賀の屈折した年齢認識が看取されよう。ただし「勉愛行二首、送小季之廬山」（其二）における年齢表現は、深刻な憂愁の直情的な叙述とはなっていない。第九句の上四字に、「維

○之○』という『詩経』にしばしば見られるフレーズを用いて、重々しく、またそれだけに滑稽な要素も加味しながら自己の姿を提示した上で、思うようにならない境遇を、諧謔を込めながら詠じていると考えられるのである。

ここまでを要するに、「二十餘」によって提出された李賀の自己像は、家族を扶養していく責任と、それが十分に可能であるという自負、またそうした自負とは相反する現実を同時に抱えた存在として描かれているといえる。

李賀は「二十餘」の語をもう一例用いている。これは李賀自身ではなく作中人物の年齢に当てられており、「榮華樂」（『箋注』二五三頁）の冒頭に、「鳶肩公子二十餘、齒編貝、唇激朱（鳶肩の公子 二十餘、齒は貝を編し、唇は朱を激す）」とある。「鳶肩の公子」、すなわち後漢・梁冀の榮華の様子を主題とする作品となっており、彼のきらびやかな身なりや、宴会に居合わせている女の華やかさ、あるいは私財を惜しまない豪快さなどが縷々述べ立てられている。この詩における「二十餘」は、若くして貴顕の身分になったことその若さを強調する役割を果たしている。同じ「二十餘」という語ではあっても、表現対象の相違によって、それが用いられる文脈は、「勉愛行二首、送小季之廬山」（其二）とはまったく異なっているのである。

「二十」の語に限定しなければ、李賀の詩には他にも他者の年齢に言及した表現が見受けられる。具体的には、「酒罷、張大徹索贈詩、時張初効潞幕」（『箋注』五六〇頁）の冒頭に、「長鬣張郎三十八、天遣裁詩花作骨（長鬣の張郎 三十八、天 詩を裁して花にして骨を作さしむ）」と見えている。長いあごひげをたくわえた外貌と「三十八」という年齢をもって、作詩の依頼主である張徹を描出しているのである。これはひげと年齢とを関連づけて詠じているという点で、「勉愛行二首、送小季之廬山」（其二）と発想が通う。ただし、「酒罷、張大徹索贈詩、時張初効潞幕」においては張徹を賛美する文脈中に年齢表現が用いられている。先に取り上げた「榮華樂」がそうで

あつたのと同じように、自他のどちらを表現対象とするかによって、年齢表現を媒介として示される内容の方向性は相違を呈するのである。

さて、李賀自身の年齢と貧賤が結びつくもう一つの例として「南園十三首」(其四)、『箋注』五一〇頁)が挙げられる。

三十未有二十餘 三十 未だ有せず 二十餘

白日長饑小甲蔬 白日 長に饑う小甲蔬

橋頭長老相哀念 橋頭の長老 相い哀れみ念い

因遺戎韜一卷書 因つて戎韜一卷の書を遺る

年齢表現を含む第一・二句について、宋・吳正子は以下のように注している。

男兒三十成名、古人多言三十。今長吉言三十歲猶未有、但二十餘歲耳、而飢困已如此、……(男兒 三十にして名を成す、古人多く三十と言う。今長吉言うところは三十歲 猶未だ有せずして、但二十餘歲なるのみ、而して飢えて困しむこと已に此くの如し、……)。

名を成すべき三十という年齢にはまだ届かないものの、二十數歳で飢えに苦しむような生活に甘んじていると詠じるのは、前途に対する望みの薄さを示しているのである。飢えの程度は「白日」の語によって強調されているように見える。つまり本来であれば食糧を摂取すべき時間帯である日中も、李賀は腹を満たせないほど困窮を極めていたのである。「南園十三首」(其四)において年齢表現によって描出された李賀の自己像は、年齢にまつわる通念と実際の境遇とが乖離している存在として提示されており、また、作中に長老を登場させてそうした自己を憐憫の対象として詠じざるをえないものでもあつたのである。

ここまで、貧賤と関連する年齢表現を見てきた。年齢表現によって表出された語り手である李賀は、常に意に満たない、あるべき理想の自己から遠く隔たった存在であった。

(二) 早世の予感

年齢表現によって提示された李賀の自己像は、社会的不遇やそれに伴う貧苦という、意に満たない境遇に甘んじているものであった。不満は内面にわだかまって、生命の危機をも予感させる。

「開愁歌」(『箋注』一〇五頁、全一二句)は、題にあるとおり、憂さ晴らしをテーマとする。それは第七・八句に、「旗亭下馬解秋衣、請貰宜陽一壺酒(旗亭 下馬して秋衣を解く、宜陽一壺の酒を貰らんことを請う)」と見えていくように、飲酒によって囿られるのであるが、晴らすべき愁いの具体的な内実の一端は、年齢表現を用いながら作品冒頭に次のように詠じられている。

秋風吹地百草乾 秋風 地を吹いて百草乾く

華容碧影生晚寒 華容の碧影 晩寒を生ず

我当二十不得意 我 二十に当たって意を得ず

一心愁謝如枯蘭 一心 謝らんことを愁えて枯蘭の如し

秋風がひとしきり地を吹いて辺り一面に生えている草を乾かしていく寒々しい季節の中、李賀は、「我二十に当たって意を得ず」というように、虚飾を排して直接的に不如意を訴えている。また次句では、あたかも枯れゆく蘭のようになす術もなくこの世から去らなければならないのではないかという憂愁を開陳している。「二十」という年齢が象徴する若さとはおよそ対照的な精神の枯渇が、ここに示されているように。

憂愁を抱えた李賀の心理の比喩として詠じられている「枯蘭」の「枯」字は、当然予想されるように、若さよりも元来老いの表象と結びつきやすい。例えば、高適「酬岑主簿秋夜見贈」（『文苑英華』卷二四二）に、

感物我心勞 物に感じて我が心は勞し

涼風生二毛 涼風 二毛を生ず

池枯菡萏死 池枯れて菡萏死し

月上梧桐高 月上つて梧桐高し

と見えており、心勞を原因として生じたのであろう白髪と、それが象徴する衰朽にふさわしい景物として、「枯」れた池が描写されている。「涼風生二毛」の句について孫欽善『高適集校注』⁵⁰（上海古籍出版社、一九八四）は、潘岳「秋興賦并序」（『文選』卷一三）の序文に見えている、「余春秋三十有二、始見二毛（余の春秋 三十有二にして、始めて二毛を見す）」という記述を根拠として、「二毛、斑白的頭髮。此句感歎早生華髮（二毛とは白髪交じりの頭髮のことである。この句は早くも白髪が生じたことを嘆いている）」（七四頁）と述べている。つまりこの詩における白髪は、三十代という比較的早期に生えたものとして詠じられているのであり、それは実年齢と白髪の生じた年齢との不均衡性に対する慨嘆を誘引するのである。してみると、それよりも十歳以上若い二十歳の時点で、李賀が「枯」字を構成要素とする「枯蘭」の語によって象徴的に表現しなければいけなかったような、衰滅の方向へと傾いていく心理状態は、はなはだしい屈折を含んだものであったといえる。

（三）生の時間の外と内——李賀「浩歌」と白居易「浩歌行」——

以上に見てきた作品は、現実における不如意が年齢との対比によって痛切に意識されるといふ認識の構造を持つ

ていた。年齢表現によって形象される自己は、空想の境域を舞台とする作品にも登場する。「浩歌」(『箋注』一一一七頁、全一六句)がそうである。

- 01 南風吹山作平地 南風 山を吹いて平地と作り
02 帝遣天吳移海水 帝は天吳をして海水を移さしむ
03 王母桃花千徧紅 王母の桃花 千徧紅なり
04 彭祖巫咸幾回死 彭祖・巫咸 幾回か死する
05 青毛驄馬參差錢 青毛の驄馬 參差たる錢
06 嬌春楊柳含細煙 嬌春の楊柳 細煙を含む
07 箏人勸我金屈卮 箏人 我に金屈卮を勸む
08 神血未凝身問誰 神血 未だ凝らず 身みづから問う誰ぞと
09 不須浪飲丁都護 浪みなりに飲むを須もちいず 丁都護
10 世上英雄本無主 世上の英雄 本主無し
11 買糸繡作平原君 糸いとを買かひい繡ぬいして作る 平原君
12 有酒唯澆趙州土 酒有れば唯澆そそぐ 趙州の土に
13 漏催水咽玉蟾蜍 漏催し水咽ぶ 玉蟾蜍
14 衛娘髮薄不勝梳 衛娘 髮薄くして梳かるに勝たえず
15 看見秋眉換新緑 秋眉あきまゆの新緑に換かわるを看み見る
16 二十男兒那刺促 二十の男兒 那なんぞ刺促たる

冒頭の四句では、山が風に吹かれて平地となり、海がその位置を変え、西王母の桃花が千回咲き、普通ではありえないような長寿者である彭祖や巫咸をもつてしても何度も死を迎えなければならぬほどの龐大な時間の経過を提示する。そして第十三句に詠じられている水時計に象徴される時間の経過は、漢の武帝に寵愛された衛娘の美しい毛髪をも奪っていく。

「浩歌」詩全体について最新の解釈を提出しているのは、遠藤星希「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」(『日本中国学会報』第六五集、二〇一三)である。遠藤氏は、諸家の見解を総合的に勘案しつつ、作品内部に流れる時間について詳細な考察を施した上で、「二十の男児」と見えている末尾の句について次のように述べている。

たとえ大きな変化——海が陸となるような——が起こったように見えても、循環する四季のように——陸が再び海に戻るように——また元のところに戻ってしまう。そうである以上、今ある生をあくせくと燃焼させたとて何になる。末句「二十男児那刺促」からは、そのような諦念・無力感こそ読みとられるべきではないか。(六三〜六四頁)

循環する時間からめとられた存在であるという点で、李賀が自身と自然物との間に共通性を見出し、しかも、そうした時間の無限のサイクルからの脱出不可能性を自覚しているからこそ、諦念を表明したものとして末尾の句を読むべきだと、遠藤氏は捉えているのである。十分首肯に値する見解となっているが、とりわけ年齢表現に着目すると、多少の議論を追加しておく余地が残されているように思われる。すなわち、李賀自身を暗示する「二十の男児」の「二十」も「男児」もともに彼の属性を示すに過ぎず、一句を単独で取り出してみれば時間の経過によって変化を被る存在としては描出されていないため、無限の循環を繰り返す時間の中に放り込まれている自然物や衛娘とはなじまない異質な要素が読み取れるという点についてである。自然物や衛娘は、時間の経過によって

不可避の変化を余儀なくされるといふ万物に課された真理を、それぞれの相において、いわば十全に体现しているのに対し、「二十の男児」は、そうした真理からも置き去りにされ、「二十」というある特定の時点にしか位置することを許されていない極めて限定的な存在として描かれている。してみると末尾の句は、自身を壮大な時間のサイクルそのものから疎外された存在であると覚った李賀が、「二十の男児」、つまりは作中の自己に対して、自分一個のいかなる抵抗によつても現にいる自己以外の存在への変容はありえないという苦しい認識を促したものとしてみることが出来る。裏を返せば、その壮大な時間の循環の内部においてなされる万物の営みに、自分もその一部として参画しようと李賀はしていたはずである。その意欲を自分自身で断念せざるをえなかったところに、「二十」という一時点を見据えて生きざるをえない李賀という存在の深い悲哀が潜んでいると考えられる。仮構された自然物や人間——ここでは衛娘——の変容を、李賀はどこからともなく「看見」ていることしかできない。時間の経過とそれがもたらすダイナミックな変化のうねりを端から眺める傍観者としての絶対的に孤独な姿が、末尾の句から立ち上がってくるのである。

次に考えてみたいのは、無限に循環する時間から疎外される自己の表象は、必ずしも一般的な自己認識の在り方ではなかった可能性があるという点についてである。これについて考察していくに当たって、李賀の「浩歌」と同様の題を持つ、白居易（七七二〜八四六）の「浩歌行」（謝思焯『白居易詩集校注』中華書局、二〇〇六、九〇二頁）を取り上げよう。詩題が類似しているばかりではなく、ともに年齢表現が用いられていることも、両首に共通する。

白居易「浩歌行」は、李賀詩とは異なつて作品冒頭に年齢表現が用いられている。すなわち第三句から第六句にかけて、

鬢髮蒼浪牙齒疏 鬢髮 蒼浪として牙齒疏らなり

不覺身年四十七 覺えず身の年四十七

前去五十有幾年 前に五十を去ること幾年か有る

把鏡照面心茫然 鏡を把つて面を照らし心は茫然たり

と詠じられているのがそうである。四十七歳の白居易は、髪が白くなって歯も抜けはじめており、五十手前であるといえ、鏡の中に自分の衰えた姿を映しては茫然たらざるをえないでいる。詩は必然的に過ぎゆく若さを惜しむ思いの表明へと傾き、その心情は死に対する感慨に赴いていく。

15 賢愚貴賤同帰尽 賢愚 貴賤 同じく帰尽し

16 北邙冢墓高嵯峨 北邙の冢墓 高くして嵯峨たり

17 古来如此非独我 古来此くの如くして独り我のみに非ず

18 未死有酒且高歌 未だ死せずして酒有れば且つ高歌せよ

19 顔回短命伯夷餓 顔回 短命にして伯夷は餓う

20 我今所得亦已多 我今 得る所亦た已に多し

21 功名富貴須待命 功名 富貴 須らく命を待つべし

22 命若不來知奈何 命若し来たらずんば知んぬ奈何せん

李賀が長大な時間の経過を観念的な位相において語っていたのに対し、白居易は四十七歳まで生きてきた自身の具体的な生の内部に、若さを保ちえない無常なる時間の経過を認めている。しかし白居易はそうした無常感を単なる悲哀の対象としているのではない。生命の終着点である死が、「賢愚貴賤」、つまりは万人に等しく約束され

ているという真理を述べ、「独り我のみ」その命運から逃れる術などないことを確信し、酒と高歌放吟によって生の充実を図ろうとする。白居易は、さらに生の時間を肯定的に捉えなおすために、顔回や伯夷といった歴史人物を引き合いに出して自分の境遇と比較する。「顔回の短命」と比べれば、決して短くはない時を過ごしてきたと、「知足」の精神に基づいて彼は感慨を漏らす。すなわち白居易「浩歌行」には、生きてきた生の時間と、現在から死に至るまでの生の時間の両方を視野に入れつつ、自分自身の生の在り方に積極的に介入しようとする態度が濃厚にうかがえるのである。「古来此くの如くして独り我のみに非ず」というように、時間の経過による不可避の変化を運命づけられた万物の在り様を、自分自身の内部に感得し、またそれを理知的に引き受けるところから、充足感を獲得するための自身の生への介入が可能になると考えられる。

翻って李賀は、自己存在の有無とは無関係に延々と流れる経験不可能な長大な時間をまずは想定し、それとは対照的な極小な一時点を生きる二十歳——二十年間生きてきたという時間の幅を示すのではない——の自分を相対的に位置づけている。白居易が生の内面を見つめながら詠作しているのは異なつて、李賀は自身とは無関係に外部に流れる時間を傍観する視座を基盤として、自己を把握しているといえる。

山や海といった巨大な自然物から一女性の頭髮に至るまで、時間はあらゆる事物に免れられない変化をもたらす。しかし李賀の「浩歌」における「二十の男児」は、そうした絶対的な真理にすら疎外される存在として形象されている。換言すれば、李賀自身を暗示するところの「二十の男児」は、変化の可能性を喪失していたのである。もちろん変化の可能性は現在の境遇の改善を保障するものではない。それは人間を衰滅の方向へと押しやる無言の暴力でもありうるわけである。しかしそうと知りつつなお自己の潜在的な持ち前の、十全なる發揮を李賀が欲していたとするならば、変化の可能性の喪失が、彼にこの上ない鬱屈を強いることとなるのは理の当然である。変化の可

能性の喪失とその自覚については、次項で改めて見ていく「贈陳商」に、より明確な形で見受けられる。

(四) 若さと老いの同一視

本論冒頭でも言及した、「贈陳商」の書き出しの八句を改めて引いておこう。

長安有男兒 長安に男兒有り

二十心已朽 二十にして心已に朽ちたり

楞伽堆案前 楞伽 案前に堆く

楚辭繫肘後 楚辭 肘後に繫く

人生有窮拙 人生 窮拙有り

日暮聊飲酒 日暮 聊か酒を飲む

祇今道已塞 祇今 道已に塞がる

何必須白首 何ぞ必ずしも白首を須たん

前途に窮した李賀は飲酒や読書によって時をやり過ぎつつも、「人生 窮拙有り」、つまり人生というものには貧窮もあれば行き詰まることもあるものだ、というようにもってもらしい理屈を自分自身の個別の状況に援用して、ひとまずここでは自らを慰めているのだろう。そして、すでに行き着くところまで行き着いてこの先どのような好転も望めないと覚る捨てる態度が、このまま年をとって白髪頭になるのを待つまでもないと詠じる第八句に表面化している。第二句にあった「二十」の語に象徴されている若さの中に、逆境を跳ね返すようなエネルギーの奔逸を、本来的な性質として認めているからこそ、年齢的にはまだ若い今の自分と、白髪の生えそろうた老境を観念的

に同等と見なすことで、そこに逆説的な表現が成立するのである。

ここで着目したいのは、典型的な老いの象徴である白髪（Ⅱ「白首」）が詠じられている点である。ただし、第八句の「白首」は、現に生えている白髪の描写ではなく、年齢を重ねていった末にやがて訪れるであろう肉体的変化、ひいてはそれに伴って現在とは異なっているはずの境遇の象徴として用いられていると解釈できる。つまり「贈陳商」に詠じられている白髪は歎老の対象ではなく、変化の可能性を内包する、現在から未来への時間の経過を暗示しているのである。だからこそ、老いゆくまでの時間の中に前提的に含まれているべき境遇改善の可能性を、「二十にして」、あるいは第七句にいうところの「今」の時点ですでに喪失してしまったと感得した李賀の悲哀は、痛烈なものとして響くのである。

「白髪になるのを待つまでもない」という、いうなれば白髪以前の白髪を詠じる詩句は、他の唐詩にも見受けられるが、必ずしも「贈陳商」のように否定的文脈にのみ用いられるわけではない。一例として杜甫の「贈裴南部」（『杜詩詳註』巻一二）には、「即出黄沙在、何須白髪侵（即ち黄沙を出でて在らん、何ぞ白髪の侵すを須いん）」と見えている。この詩は、詩題にいう「裴南部」が獄に繋がれたのを杜甫が案じて作ったもので、引用した二句は、すぐに出獄できるであろうから、白髪が生じるほどの愁いに沈む必要はないと述べている。李賀は境遇改善の可能性が胚胎している未来の喪失の象徴として、一方、杜甫は気楽に境遇改善を待ち望む姿勢を相手に促すものとして、白髪以前の白髪を詠じているのである。前途に対する憂愁を抑制しようとする方向性にあるか否かという点において、李賀と杜甫の表現は相違しているといえる。

そもそも李賀詩の第二句にある「朽」字は、例えば王維「老将行」（陳鉄民『王維集校注』中華書局、一九九七、一四八頁）に、「自從棄置便衰朽、世事蹉跎成白首（棄置せられて自從り便ち衰朽し、世事蹉跎として白首と成

る」と詠じられていたり、崔顥「江畔老人愁」（『全唐詩』卷一三〇）に、「青溪口辺一老翁、鬢眉皓白已衰朽（青溪口辺の一老翁、鬢眉 皓白にして已に衰朽す）」と見えていたりするように、現に生じている白髪や老いとこそ齟齬なく結びつくものである。以上の二例は作中人物について述べた句であるため（王維は「老将」、崔顥は「老翁」を表現対象としている）、李賀詩と比較するにはやや発想が異なっている。しかしだからこそ、白髪や老いと「朽」字とを関連づけて詠じるという自然な連想の枠組みからは逸脱する心理的様態、すなわち「二十」と「朽」が結びつくような特異な状態を、作中人物ではなく自分自身の内部に認めざるをえなかったところに、人並みに老いていくことすら許されていない李賀の、複雑な生の位相——若さと老いの同時的顕現——が隠見しているのである。

おわりに

先に取り上げた孟雲卿「傷懷贈故人」に、「二十学已成、三十名不彰」と詠じられていたように、十年を一期としてそれを対に構成しながら、過去を回想し、あるいは未来を展望するといった型を持つ表現は、他の唐詩にも散見される。が、二十代での早世という伝記的事実に鑑みるならば、李賀はこうした年齢表現を詠じるには若すぎた。その必然的帰結として、李賀が自身を対象として年齢表現を用いるに際しては、常に現在という限定的な一時点との対峙を余儀なくされていた。こうした生の時間の認識の在り様は、過去から現在、または現在から未来へと続いていくはずの自己存在の連続性の喪失に他ならない。換言すれば、それはいかようにも変化しうる可能性の喪失でもある。そしてその変化の可能性は、とりもなおさず加齢——及びそれが必然的にもたらす老い——によって行

使されるはずであるが、未来と断ち切れてしまった李賀は、時間の経過によって順次到達すべき生の時間の諸段階を、現在の自己の内部に同時的に見出さざるをえなかった。だからこそ、「贈陳商」がそうであったように、老境と「二十」である現在とを同一視しながら自己を表象しているのである。若さと老いという対立的な要素の混在、矛盾をはらんだそうした状態こそが、年齢表現の裏側に貼り付いている李賀の心理の、見逃せない特徴であると判断できる。

李賀は若き老境とでも呼ぶべき錯雑した生の時間を自覚的に生き、そしてそうした生き方に対する省察を施す間もなく、「白玉楼中の人」となって世を去ったのである。

*一 作者自身の二十代という年齢を記したものとして、李賀と同じく三十歳に至らずして早世した王勃の「春思賦」(『王子安集注』巻一)に付された序文に、「咸亨二年、余春秋二十有二。旅寓巴蜀、浮游歳序」と見えている。ただし王勃は詩の中には「二十」の語を用いていないようである。

*二 初句と第二句の関連性について補足しておきたい。「贈陳商」と同じように「長安」の語によって書き出される唐詩は少なくない。王維「隴頭吟」(陳鉄民『王維集校注』中華書局、一九九七、一四五頁)に「長安少年游侠客、夜上戍楼看太白」、高適「行路難二首」(其二)(孫欽善『高適集校注』上海古籍出版社、一九八四、一頁)に「長安少年不少錢、能騎駿馬鳴金鞭」と詠じられているなどがそうした例に該当する。これらはほぼ例外なく都会的でないせな若者を表現しているため、「贈陳商」の初句を見た読み手は、王維や高適に連なるような類型的な作品の筋書きを期待したはずである。その期待は、「心已に朽ちた」「二十」歳の若者が登場する第二句によってあっけなく裏切られることになる。李賀は、初句と第二句の間に落差を設けることで、固着した類型表現の枠組みを意図的に逸脱しているといえる。なお、李賀が詩に用いた「長安」は、大都会の華やかさとは対照的な負の価値を付与

されることが多かったようだ。「崇義里滯雨」（『箋注』二二六頁）の冒頭に「落漠誰家子、來感長安秋」、「京城」（『箋注』四四五頁）の冒頭に「驅馬出門意、牢落長安心」とあるのは、自己実現の方途を喪失し、それによって精神的な深手を負った場所として詠じられているし、「感諷五首」（其三）（『箋注』三六六頁）に「長安夜半秋、風前幾人老」と見えているのは、人々が老い衰えていくイメージと重ねられている。

*3 『樂府詩集』卷六十六に李賀の作として載せられている「少年樂」に、「芳草落花如錦地、二十長遊醉鄉裏」という句が見えているが、この作品について清・王琦が、「似皆後人擬作、非長吉錦囊中所貯者」と述べているのに従って、本論では考察の対象から除外する。なお、王琦注の引用は、王琦等注『李賀詩歌集注』（上海人民出版社、一九七七）に収録されている『李長吉歌詩彙解』（外集）に拠る。

*4 『全唐詩』卷二百六十八においては李端の「塞上」として収録されているが、佟培基編撰『全唐詩重出誤收考』（陝西人民教育出版社、一九九六）の調査に従って、本論では盧綸の作であると見なす。

*5 李賀の「二十心已朽」と、孟雲卿の「二十学已成」という句には、「二十」のみならず、「已」字が共通して用いられている。「心」が「朽」ちるにしろ、「学」問が成就するにしろ、まだ「二十」であるにも関わらず過剰な状態に至るのは普通でないという認識を、両者がともに持っていたからであろう。

*6 『杜詩詳註』が引く臧榮緒の『晋書』に、「陸機少襲父兵為牙門將軍、年二十而吳滅。退臨旧里、与弟雲勤学。機妙解情理、心識文體、故作『文賦』」とある。

*7 これについては緑川英樹「成熟と老いの詩学認識——杜甫から歐・梅まで——」（『中国文学報』第六三号、二〇〇一）に指摘がある。緑川氏によれば、老成や成熟といった老いの価値的側面を意識的に作品化したのは、杜甫を嚆矢とするという。「庾信文章老更成」の句のように、他者の作品を評する際に「老」字が選択されているのに加え、杜甫は自身の創作営為の中に、こうした「老」の積極的な価値を内在化させていたとも述べられている。

*8 科挙受験と陸機の「文賦」制作を関連づけて詠じた杜詩に類似している例として、李商隱「贈孫綺新及第」（劉学鍇・余恕誠『李商

『隱詩歌集解（増訂重排本）』中華書局、二〇〇四、二二二頁）に、「陸機始擬誇文賦、不覺雲間有士龍」と見えている。ただし詩を送った相手が落第したのか及第したのか、という点で杜甫と李商隱の表現には偏差が認められる。

*6 李賀自身にも該当する類例があり、「詠懷二首」（其二）（『箋注』六五頁）の冒頭に、「日夕著書罷、驚霜落素糸。鏡中聊自笑、詎是南山期」と見えている。「素糸」は白髪を指す。李賀は、鏡の中に映った自分の白髪姿を見て、「南山」が象徴するところの長命など保てないだろうことに対して、苦々しくも「自ら笑」わざるをえないのである。

*10 『岑參詩集編年箋註』も同様であるように、李賀詩に対する従来の注釈も、『樂府詩集』卷二十八に収録されている「陌上桑」の「為人潔白皙、鬢髮頗有鬢」という二句を引くものが多い。ただしこの二句は、「十五府小史、二十朝大夫。三十侍中郎、四十專城居」という四句に後続する句であるため、必ずしも李賀詩の「二十餘」や岑參詩の「三十」とのみ密接に結びついているとはいえない。

*二 管見の範囲では、これまで必ずしも『詩経』の影響は指摘されていないようである。同様の構文を持つ句は『詩経』に散見されるため、李賀が念頭に置いていた作品を特定するのは難しい。そのために注記するのが控えられてきたものか。私見を述べておこなうらば、例えば、大雅・文王之什・「文王」に、「王国克生、維周之禎。濟濟多士、文王以寧」と詠じられているのを踏まえているとすれば、あたかもかつて文王を補佐したようなすべれた臣下たる自負を詩句に込めていることになろう。

*12 原田憲雄『李賀歌詩編一——蘇小小の歌』（東洋文庫、一九九八）は「維爾之昆」について、「書経風の、日本でなら戦前の『教育勅語』のように古めかしく、厳めしい言い方。幼い弟におどけてみせ、その『勅語』を下すお方に仕えてみても、二十歳をすぎて家族も養えず、碌な事はなかったと、第一二句に繋がる。……」（四三五頁、傍点は筆者による）と注を付している。また、第十二句の表現は、『漢書』卷六十五・東方朔伝の、「無令但索長安米」という記述に基づくものとされており、この一文を含む『漢書』の一節は、周りの臣下たちより体が大きかった東方朔が、体格に合わせて待遇を改善してほしいとって天子を笑わせ、それによって結果的に厚遇を獲得したという話である。この逸話を踏まえた表現となっていることは、原田氏いうところの「おどけ」を李賀詩から読み取るのが妥当であることの傍証となろう。

*13 『後漢書』卷三十四・梁冀伝に、「冀字伯卓。為人鷹肩豺目、洞精矚眄、口吟舌言、裁能書計。少為貴戚、逸游自恣」とある。

*14 他者を対象とする年齢表現は他の李賀詩にも認められる。「美人梳頭歌」(『箋注』一五頁)には、「春風爛熳惱嬌慵、十八鬢多無氣力」、「公無出門」(『箋注』六二八頁)には、「鮑焦一世披草屨、顏回廿九鬢毛斑」と見えており、どちらも毛髪に関連する語と年齢を関連づけて詠じている。後者の例について補足しておきたい。これは『史記』卷六十七・仲尼弟子列伝の「回年二十九、髮尽白、蚤死」、すなわち顏回が二十九歳で頭髪が真っ白になり、しかも早死にした、という記述に材を取った表現である。李賀「春暉昌谷」(『箋注』四六二頁)に「終軍未乘伝、顔子鬢先老」とあるうちの「顔子」の句も同様である。唐詩における「顔回」や「顔子」といった語の用例を見ると、「従軍誰謂仲宣樂、入室方知顔子貧」(錢起「過張成侍御宅」、阮廷瑜『錢起詩集校注』新文豊出版、一九九六、七〇〇頁)という顔回の貧しさに焦点を当てた表現や、「顔回与黄憲、何辜早天亡」(白居易「郊陶潜体詩十六首」(其十六)、謝思焯『白居易詩集校注』中華書局、二〇〇六、五一七頁)といった顔回の早世に思いを馳せた表現は散見されるものの、白髪と結びつけて詠じた例は、意外なようではあるがほとんど見当たらない。上述のように、李賀は顔回の白髪に着目した表現を複数残しているため、唐代の他の詩人とは角度の異なる関心を、顔回に寄せていたと判断できる。

*15 引用は『唐李長吉歌詩箋註』(『和刻本漢詩集成』第五輯、汲古書院、一九七五)卷一に拠る。

*16 同書は引用した詩句の「生」を「驚」に、「枯」を「空」に、「上」を「出」に作っているが、本論では仮に『文苑英華』に従っておく。

*17 『箋注』は「勸」を「動」に作るが、諸本によって改めた。

*18 顔回のいかなる側面に焦点を当てて作品化するかが、各詩人の関心の在り様を示唆しようということについては、注十四を参照。

*19 白居易の年齢表現に関する論稿に、高芝麻子「白居易詩における年齢の言及」(『白居易研究年報』第一〇号、二〇〇九)がある。高芝氏は白詩における年齢表現の特徴の一つとして、知足の精神に基づく表現が見受けられるという点を挙げている。

*20 白居易のこうした生の時間の捉え方については、前掲高芝論文に考察がある。なお、高芝論文が指摘するように、白居易の年齢表現には、五年や十年、場合によっては二十年ごとに区切って年齢を並列し、過去から未来にかけての生の時間を捉えようとする

態度が顕著である。他者を表現対象とする場合も含めて具体例を示しておくならば、「贈言」（『白居易詩集校注』七一七頁）の「二十方長成、三十向衰老」、「題贈定光上人」（同七六四頁）の「二十身出家、四十心離塵」、「朱陳村」（同七七七頁）の「十歳解讀書、十五能屬文。二十舉秀才、三十為諫臣」といった句が挙げられる。

*21 こうした見方については、遠藤星希「李賀の詩にあらわれた時間意識について——女神の時間、永遠の現在——」（『日本中国学会報』第六一集、二〇〇九）を参照。

*22 「何」と「須」を一句に構成した表現は他の唐詩にも散見されるが、その中でも杜甫や李賀と同じように頭髮と取り合わせて詠じられた例は少なくない。皇甫冉「酬裴十四」（『全唐詩』卷二五〇）の「素心終不易、玄髮何須變」、王建「鬪白」（王宗堂『王建詩集校注』中州古籍出版社、二〇〇六、五一二頁）の「総道老來無用處、何須白髮在前生」、韓愈「奉和庫部盧四兄曹長元日朝迴」（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』上海古籍出版社、一九八四、九三七頁）の「太平時節難身遇、郎署何須歎二毛」といった詩句がそれに該当する。

*23 一例として注二十を参照。

*24 「南園十三首」（其四）に「三十未有二十餘」と詠じられていたのが唯一の例外であるが、これも「二十餘」から「三十」にかけての時間の経過を想定しているのではなく、まだ到達していない「三十」という年齢を、「未だ有らず」と否定形で詠じることによって「二十餘」である現在の一時点を強調しているに過ぎない。

（筑波大学大学院人文社会科学科博士課程）